



羅針盤

2014年度 第12号
都立豊多摩高等学校
進路図書部
2014.11.5



3年生の一部では、推薦入試がスタートしています。2年生は、自分もあと1年でその立場になるかもしれないのを意識しましょう。推薦入試の中心は、面接と小論文です。3年生には今まさに模擬面接を実施して試験対策をしているところですが、1, 2年生も試験の概要を知って、今後の学習に役立ててください。

・面接

面接には、個人面接と集団(グループ)面接の2つのタイプがあります。個人面接は受験生1人に面接官1人または2~3人で行われます。集団面接の場合は、受験生2~5人に対して面接官1~4人で行われます。

自分の志望する大学がどのような内容で試験を実施しているのかは、進路指導室に記録のファイルがありますし、インターネットで情報を得ることもできます。進路図書部の先生に相談してください。

面接官は、あらかじめ提出されたエントリーシート(志望理由書)を元に質問します。採点のポイントは主に4点です。

1. 学習意欲(志望理由は明確か、志望校を理解しているか)
2. 適性(基礎学力はあるか、志望学部・学科の特性に合っているか)
3. 人間性(自主性、向上心、協調性など)
4. 社会性(一般常識、コミュニケーション能力、礼儀・態度など)

面接で必ず聞かれる質問は以下のものです。

「なぜこの大学を受験したのですか」

「なぜこの学部・学科を志望しているのですか」

「将来はどのような進路を目指しているのですか」

大事なものは「一般論」ではなく、「自分自身」について語ることです。

「見学に来て雰囲気良かったから」とか「この大学は実績がある

から」ではなく、「私は〇〇について興味があって、勉強したり関連の本を読んだりしてきたのですが、それをさらに深められるのが貴学の△△学部であることがわかり、特に△△の講座などに大いに興味を抱いたので志望しました」といった回答が面接官に好印象を与えます。



・小論文

小論文では、「漢字力」や「表現力」もチェックされますが、最も重要なのは「問題意識」に基づく「論述力」です。小論文の設問形式で多いのは、「~について意見を述べよ」「~について考えを書け」などですから、自分の考えを自分の言葉で明確に述べるのが大切になります。

対策として効果的なのは、日頃から「本や新聞を読む」ことです。新聞のコラムなどを、要約を意識しながら読みましょう。図書館の新聞ファイルや、スマホで無料で読める新聞サイトも活用できます。統計や資料の読み方は、過去問などで慣れておきましょう。「東日本大震災と原発事故」「グローバル化」「ネット社会」「地球温暖化」「新エネルギー」「少子高齢化社会」「幼児虐待・いじめ」「消費税率引き上げ」など、最近出題が多い時事項目をチェックして準備しておく必要があります。



皆さんご存知の通り、先ごろ日本人研究者3人にノーベル物理学賞が授与されると決まりました。受賞理由は「青色発光LEDの開発」です。難解な素粒子理論などと違って、私たちの身の回りにある製品の発明物語に基づくものですから、一層うれしく感じますね。3人のインタビューも数多く報道されましたが、示唆に富んだ言葉がたくさん語られましたから、一部を振り返ってみたいと思います。

◇中村修二さん（カリフォルニア大学教授）

Q「若い、これから研究の道に入る方へのメッセージをいただけますか？」

A「私は小さいころから科学が好きで、科学が好きというのは、研究していくといろんな問題があって、その問題を、謎を解くような、クイズを解くようなイメージです。そういうのが好きで、何か問題があれば解くのが好きで、それで研究をやったので、若い人も自分の好きなことを見つけて、それに向かって勉強してほしいです。そうすれば、いろんな苦労があっても続けてできると思うので、やはり一番大事なことは、若い人は自分の好きなことを見つけて、それに向かって勉強、あるいは仕事をしていくということですね。」

（2014年10月7日TBSニュース）



◇赤崎勇さん（名城大学終身教授）

「誰もやったことがないというのは、できるか分からないということ。できることをやるのとは違う。長い間、孤独に耐える決意が必要だ」。一時この研究は、世界で赤崎さんたちだけになり、親しい友人にさえ「まだやっているのか」と言われた。「われ一人荒野に行く、という気分だった。企業の中で、人が論文を20本書く間に一本も書けない状態はさすがに大変だった」と振り返る。

52歳で再び名大へ移り、実験炉作りから出直した。青色LEDを最初に実現したのは89年。窒化ガリウムの有望性を知ってから、20年が経過していた。

現在、窒化物半導体は半導体で最も活気のある研究分野に育った。最先端に行く赤崎さんの論文は今や650編以上、特許は180件以上。「好きこそもの上手なれ、と言うでしょう。私は窒化ガリウムを『究極の半導体』と信じていた。純度を高め、良質の結晶が手に入れば本来持っている性質が必ず現れると信じ、結晶作りに専念した。近道はなかったのです」

（2014年10月7日毎日新聞）

◇天野浩さん（名古屋大学教授）

名大卒業を控えたころ、ノーベル賞を共同受賞する名城大教授の赤崎勇さん(85)から「大学院に進んで研究を続けよ」と助言され、その後、ノーベル賞につながる成果を出した。こうした自らの経験から、「大学院生がしっかりと基礎研究に取り組める環境が大切。奨学金もあるが、返さなくてはならず、かなりの負担になる。何とかしたい」と若手育成のためにも尽力するつもりだ。赤崎さんは青色LEDの実現に、十六年の年月をつぎ込んだ。対照的に、成果を急ぐ風潮が強い今の科学界に、「芽が出そうなところに集中投資するのが良いという議論もあるが、決してそうではない。いろんな分野に投資して、それぞれの分野の人が実用化に向けて頑張ることが大切」と警鐘を鳴らす。

（2014年10月25日中日新聞）

こうした人たちがすごいのは、「もともと天才」だったわけではなく、自分の信じたことを実現するまで、とにかく粘り強く取り組み続ける姿勢なのですよね。私たちも参考にしましょう！

以上